

書

評

アジア神学講義

グローバル化するコンテクストの神学

森本あんり著

著者は国際基督教大学の新進気鋭のプロテスタント神学者であり、評者もよく存じ上げている。本書は、日本の神学界がとかく欧米神学の輸入と解釈になりがちな傾向を打破するため、東アジア的な文化背景を自覚的な文脈と

し、アジアの歴史と文化に受肉した神学を目指している神学者で、しかも欧米でも知られている四人を取り上げて、その主張を批判・検討したものである。「講義」とあるのは、著者が米国のプリンストン神学校で行った講義に由来するからである。

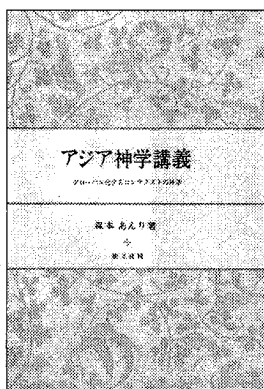
四人とも体系化した神学の形で述べているわけではないが、印象的な論点を紹介しよう。韓国出身のアンドルー・パクは、「罪の補完概念としての根（ハン）」を導入し、そこから原罪の新しい理解を得ようとする。台湾生まれのC・S・ソン（宋泉盛）は、ギリシア、ゲルマンに続く第三の眼としてアジアの視点からの神学を構築しようとしている。東京に生まれ東南アジアや米国で活躍する小山晃佑は富士山とシナイ山との対比からキリスト教と日本の宗教性の違いを議論する。北朝鮮出身で米国で活躍したジョン・ユン・リーは、陰陽の哲学からアジア的な三位一体論を展開しようとする。これらの神学者は日本のプロテスタント界でもあまり知られていない。例えば、日本代表なら小山よりは

北森嘉蔵を取り上げた方がよかつたとの声もあるが、著者によると欧米では日本の（プロテスタント）神学者というとまず名前が挙がるのが小山なのだそうである。

評者は神学の専門家ではなく、しかも四人の著作を読んだわけではないので正しく理解しているかどうか自信はないが、これらの神学が、アジアのコンテクスト（文脈）から神学を再検討しようとしている割には、西ヨーロッパの伝統に追随している印象を受けた。例えばリーの三位一体論は、カルケドン公会議の陰陽哲学による再解釈に見える。その源泉である聖書やその後数世紀の教会の信仰実践にまで戻って再構築したらもっと面白いものができるのではないか。

紹介するスペースがないが、著者自身による「序章」と「結章」では、キリスト教とアジア的なシンボリズムの関係、宗教混淆と二重信仰、文脈化の類型論などが論じられて面白い。ところで、カトリックの神学で同様な本を書くとしたら誰の名が出てくるであろうか。

（小柳義夫・東京大学教授）



発行／創文社（☎03-3263-7101）／菊判244頁／3800円